毎日歌壇

加藤　治郎　選

月までの透明な階段補修作業をしつつ電車通勤　大津市　佐々木敦史

〈評〉現実と幻想が融合した作品である。透明な階段が美しい。補修作業にリアリティーがある。結句は日常の場面に収まる。

おはようとベッドに飛び乗る孫ななつ我が発つ朝は部屋覗き帰る　米国　森本　弘

〈評〉孫の家に滞在したのだろう。上句は元気な孫の姿だ。結句はさびしげである。

ハニーデューハニーあなたは口笛でこの世の素肌へとくちづける　東京　石川　真琴

帰る場所だったのだろうわたくしのノートの上で消えた雪たち　津市　川原田明子

光るものぜんぶが星に見えてしまう　いちばん寒い日の窓際で　名古屋市　森本　有

聞いているときのからだはうっすらと鱗粉を纏うそれはつめたい　奈良市　古井さらさ

幸せの沸点下げる雨のなかレインコートごと君抱くバス停　神戸市　浅田　拓史

花びらは散るときに花びらになる　泣いて心を強くできない　平塚市　芝澤　樹

横髪を気にする様がセクシーで今日のランチはラーメンにした　東京　安　高良

ひとつぶのマーブルチョコがはじめなり夜明けの電話かけた日は雨　東京　青木　公正

水原　紫苑　選

ある朝のひとつの偶像崇拝がライムを清潔に切りおとす　加古川市　石村　まい

〈評〉偶像崇拝は常に批判の言葉だが、ここでは切られてなお新鮮なライムへのあこがれだろうか。

クジラには太平洋をかき混ぜる大事な仕事があるのだそうだ　倉敷市　中路　修平

〈評〉これほど大事な仕事は人間の大方も持ってはいない。偉大なクジラよ。

印象派の絵画のように三月の湖畔に立つ人みなうららかに　フランス　小仲　翠太

カワセミは翡翠、ヒスイは翡翠と綴る　世界がゆらぎやまない　千葉市　星野　香織

水面に空が入っていくのです井戸の底にも薔薇はあるのね　岡山市　松井　度

揺籃をゆるされざれば揺籃の歌いつまでも歌いつづけて　豊橋市　太田　貴大

嗜虐にも才在ることを想ひつつ春紫苑いちりんを抜きたり　国立市　蔵　井

三月のためらわなさを祝うよう桜の木から落ちる花弁の　東京　留　留　留

寄生虫みたいな名札をぶらさげた花屋のラナンキュラスの憂鬱　寝屋川市　今西　富幸

ゲルニカに幕のかかりしそのときも人々はただ眠りゐたりき　東京　岩本　遥

伊藤　一彦　選

お揃いの毛糸帽子の兄弟のやっぱり降車釦で揉める　京都市　根来　滋

〈評〉仲むつまじい兄弟が降車時にどっちがボタンを押すかでもめた。おうように眺める作者の「やっぱり」の語が生きている。

まんまるに望遠鏡でくりぬいて夜空をオープンで焼きましょう　宮崎　門田　藍子

〈評〉春の艶ある夜空への憧れを思い切った発想で歌う。「ましょう」の結びもいい。

春はもう小川をこんなに光らせて人はことばを脱いでしゃがんだ　東京　奥山いずみ

旅先でひっきりなしにエリーゼが想われている誰でもピアノ　川崎市　なつの

桜舞う風を切りゆく自転車の立ち漕ぎ急ぐ学生の波　岡山市　佐藤紘太朗

津波からおなかの中で逃げた子の十五の春の白きシューズよ　東京　稲山　博司

国守る砲弾ひとつどれだけのCO2増えるか発表は無し　東京　河野多香子

「あの頃はよかったなあ」と「今頃の若者は」との根っこは同じ　東京　志　摩

自分の名教えてくれた抱いている子犬の名前訊いたのだけど　福津市　原田　冬

一日を三十時間に生きおりし若き日の母春来れば想う　垂水市　岩元　秀人

米川千嘉子　選

杖をつく彼女を今日も見かけたり手を上げ招くプラのベンチに　大阪市　森川　慶子

〈評〉超高齢社会では孤独の問題も切実だが、さまざまにそれを癒やす小さな行動もありそう。結句にも時代感がある。

新姓を知らないままに書く手紙遠ざかるほど心はひかる　千葉市　芍　薬

〈評〉時がたち状況を知らないゆえに、率直に純粋になる他者への思いがある。

口あける夫にスプーンで食べさせる老いても照れる病室の二人　東京　岩谷　政子

浮世節絶やさぬ覚悟にほだされて寄席皆やんや若草の〝あまね〟　横浜市　島田　和生

花束のにわかに上がるワット数ミモザを二本加えてみれば　南魚沼市　木村　圭

渦巻きの鍋敷きを呑みて手術すれど犬は小枝をはやも食ひたり　鶴岡市　大沼　葉子

大方をAIに訊きふむふむと生きる日々ゆえ苦手な整列　三重　中山由賀子

この桜見れないなんて残念ね　写真の亡夫にマウントをとる　大阪市　鈴木　雅子

文字盤と針を記して広告のチラシの裏に認知テストす　浜松市　久野　茂樹

マグノリア今年はことに祈りゆく街に平和の鐘の鳴るよう　東京　河野多香子

投稿規定　はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。

こちらから投稿できます

（おことわり）次回は14日に掲載します。